

韓国北西部葛梅里遺跡における植物利用

Plant usage of Galmeri site in north-western part of South Korea

学籍番号 56838

氏名 野中 理加 (Nonaka, rika)

指導教員 辻 誠一郎 教授

1. 研究の背景

人類の歩んできた歴史上、自然のなかで資源を利用し、そして生き抜いていくために重要な資源となってきたのが、植物と動物である。特に植物は生態系を構成する主要素であり、人間の衣食住すべてとかがわりを持っているため、植物が無ければ生きていけないほど人と植物とのかかわりは深く、そしてその歴史は長い。古代の遺跡を発掘すると、しばしば昔の人々が利用した植物が出土する現場に行き当たる。そういった植物のことを植物遺体というが、そのなかでも

特に種子果実(本論では種実とよぶ)は重要な食料源であるとともに、生活の中で必要に応じた利用がなされており、発掘時にその産状を捉えることで、人がどのように利用したのか、そして堆積状況から当時の環境がどのようなものであったかを知ることが可能であり、1960年代後半以降研究が始まり、近年は古代の植物利用や生態系の復元がされるまで、研究が進んでいる。ところが、地理的にも文化的にも隣接する朝鮮半島に目を向けてみると、近年ようやく開発に伴う発掘調査が増えたことで、方法論が居に着いたばかりである。そのため既往研究も乏しく、基礎的な資料の蓄積が望まれている。

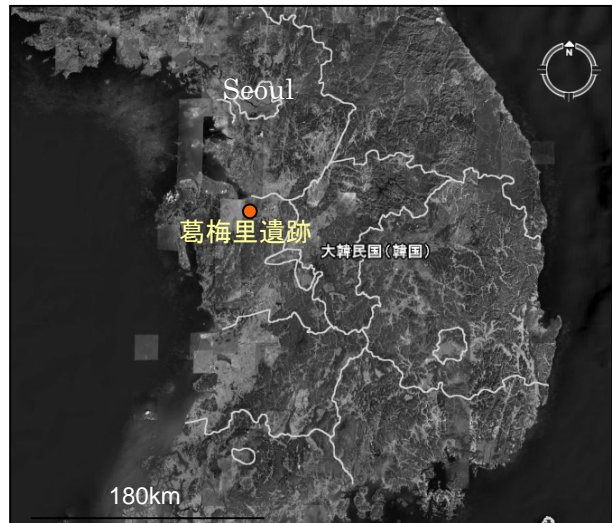


図1 葛梅里遺跡の位置

2. 研究の目的

一昨年の夏、発掘調査は終盤を迎えていたが、韓国の葛梅里遺跡において肉眼で識別できる植物遺体、多くの植物を含む堆積物の取り上げがされており、その検討ができることとなった。検討するにあたっては日本での研究史と研究の問題点を指摘しつつ、韓国の植物遺体研究を推進するための出発点とし、韓国における古代の植物利用の基礎を築くことを目的とする。

3. 既存の研究

日本の考古学はこれまで、弥生時代における農耕開始が階層社会の始まりであり、後の社会の基盤となったということから、稲作農耕、畑作農耕の研究に心力を注いできた。そして、全国各地または東アジア各地のいつの時代の遺跡からイネをはじめとする穀物がどれくらい出てきたかということ、報告書からのみで集成するということが普通におこなわれてきたのである。ところが、報告書の記載のみでは、その種実遺体がどのような状況で出土したのかを断定することは難しい。なぜならこれまでの考古学者は、遺跡や遺物に対しては目が利くが、植物遺体の知識は少ないため、専門家である古植物学者へそういった植物遺体を送り、結果を報告書に載せるだけだったからである。逆に言うところ、古植物学者もまた、植物には長けているが、土器はわからないという状況であった。それにも増して慢性的に考古学へ参画している古植物学者が少ないということも、両者の距離を縮められなかった要因であろう。それでも、70年代後半から古植物学の研究チームが発掘現場へ赴き、考古学者と同じ現場に入ることも少なくなかった。その結果、昨今では古植物学側から考古学へ植物遺体を扱う際のサンプリング法や保存法の提案がなされ、生態系の復元などをおこなえる資料が蓄積されるようになってきたのである。

今後は大規模開発がはじまった韓国において、そういった資料の重要性をアピールしていかなければならない。

4. 葛梅里遺跡の概要

葛梅里遺跡は、韓国北西部、全羅南道牙山市にある。牙山湾に注ぐ河川の後背湿地、河岸段丘面に位置しており、3世紀から5世紀の原三国時代から漢城百濟時代に人の活動があったことがわかっている。この時代の中国は後漢から三国時代、日本は弥生時代中期後半から古墳時代にあたり、いずれの国においても時代の転換期であった。

遺跡は1万平方メートルを超える広さで、そのなかでも大量の種実遺体、木材、動物遺体(骨)が産出した水路部は高麗大学考古環境研究所によっておこなわれた。土器も木器も変わった形のものも多く、鉄斧も見つかっている。しかしながら水路のほかには住居址1軒と、掘立柱址、無数のピット群などが主な遺構で、それらだけではどのような遺跡かを断定することが難しいため、種実遺体、木材、動物遺体、花粉分析から総合的な遺跡の解釈をおこなうこととなった。

5. 研究の方法

韓国、葛梅里遺跡から採取された試料をもとに検討をおこなった。試料の堆積環境はリンの含有率が多い藍鉄鋼を含む土壌であった。

種実試料は肉眼で同定でき、発掘現場ですでに認識され選別されていた現地取り上げ試料と、土をそのまま取り上げた土壌試料があった。土壌試料は篩による水洗選別を行い、実態顕微鏡下で同定作業を行った。その結果水洗選別で

得られた種実は(表)のような組成になった。

また、現地で取り上げられた資料には図2のウルシ塗り加工が施されているヒョウタンの容器片をはじめとし、ヒョウタンの果梗部、果実片、モモ、マンシュウグルミ、クリ、ハシバミ、メロンといった組成であった。

(表) 水洗選別サンプルの組成

	G08	D	モモ内果皮完形1破片1,ヒョウタン果実片3,ヒョウタン種子700(3),メロン種子1(4),オナモミ種子1(5)
	G20	D	キイチゴ属1,メロン種子23,ブドウ属種子4,イネ炭化胚乳(額付含む)78,アサ炭化種子1,カナムグラ種子11 不明種子1,不明炭化種子1
	G22	D	ヤマグワ種子多量,キイチゴ属種子,イネ炭化胚乳(額付含む)80,アサ,カナムグラ,マメ科炭化種子, タデ科種子多量,シソ科種子1,不明炭化種子
	G23	D	ヒョウタン果実片2,
	G25	D	ヒョウタン種子5,メロン種子多量,サルナシ種子,キイチゴ属種子80,ブドウ属種子4,アサ種子,カナムグラ種子, シソ科種子5,マメ科種子5
	G26	D	ヒョウタン果実(ウルシ塗容器片)2(接合可能)
	G01	E	モモ内果皮完形1,ヒョウタン種子132,イネ炭化胚乳1,オナモミ種子13,ブドウ属種子7,カナムグラ種子30, マメ科種子5,ナス科種子1
	G11	E	モモ内果皮2
	G19	E	モモ内果皮4,メロン種子多量
	G28		ハシバミ果皮1,モモ内果皮完形2破片7,マンシュウグルミ内果皮破片1,ヒョウタン果実片1,ヒョウタン種子23, メロン種子多量,アサ種子1,ヤマグワ種子,キイチゴ属種子,サンショウ属種子,サルナシ-マタタビ種子9,ブドウ属, タデ科種子多量,マメ科種子1,不明幼果1
	G31	E	ヒョウタン種子7,メロン種子多量
	G34	E (A-1)	モモ内果皮片3,不明果皮片1
	-	F 穴001	ヒョウタン種子2051

6. 葛梅里遺跡の植物利用

葛梅里遺跡から出土した人が利用したと思われる種実遺体群の様相をみると、漆塗り加工のヒョウタンの果実片、ヒョウタンの果梗部、ヒョウタンの破片、大量のヒョウタンそしてメロンの種子、さらに人為的に割られたマンシュウグルミとモモの内果皮、人が剥いた破片であるクリ果皮やハシバミといったものである。

このうち、漆塗り加工のヒョウタンに関しては、容器片とみて間違いないが、ヒョウタンの果梗部片は容器を作るために切り落とされたのか、食べるために切り落とされたのかは定かでない。また、果梗部から復元される果実の形が器としても食用としても有用なユウガオタイプのものである可能性が高いことから、食用にしていたといえる。ただし、ヒョウタンの果実の胴部の細かい破片が多いことは果実を割って食べた食用を示唆し、また、大量の種子も果梗部を切り落とした後に胎座の部分ごと剝き抜いてそのまま破棄したものと考えられる。ヒョウタンの具体的な歴史や種類、利用法など

は次項で取り上げるが、葛梅里遺跡のヒョウタン遺体の産状から、その場で加工し利用していたことがわかる。しかしながら、出土する種子の量に比べて果実の産出が少ないことは、胃袋に収まったということなのか、容器にして持ち去ったということなのかは、今後の類似する遺跡の調査報告を待つて検討したい。

ヒョウタンの次に出土が顕著であったのが、モモとマンシュウグルミの内果皮である。両者とも自然に割れるか、打撃による半裁か、もしくは完形であった。モモは完形が最も多く、マンシュウグルミは打撃による半裁が最も多かった。また、ネズミなどのげっ歯類による食害痕がみられることから、内果皮の状態で作っていたと思われる。モモは完形が多かったことから果実も食し、内果皮の中の荏の部分も食していたと考えられる。

さらに目立っていたのはメロンの種子である。メロンはおそらくその形態からマクワウリタイプのメロンであると推察され、ある程度まとまって産出することからも、果実を食べて種子をそのまま破棄したといえる。マクワウリは現在の韓国でも初夏の果物として市場に並び、甘く多汁で美味なことからデザートとして日常的に食べられている。また、クリやハシバミといった堅果類も剥き殻の状態出土しているため、全体的に見て食べることへの利用が多かったように考えることができる。

7. 葛梅里遺跡の性格

「市場」や「祭祀遺跡」などのほかに考えられうる遺跡の性格は、「椿市」や「歌垣」といった男女の逢瀬を行うための場所という可能性である。その理由は、産出する種実遺体は夏から秋にかけて結実する植物であり、そういった季節性を考慮した場合、祭祀として最もポピュラーな春の豊作祈願ではないことがわかる。さらに豊作を祝っての祭祀ならば、イネの出土がもっと顕著であってもいいように思う。

しかしながら、古代の「市場」はいわゆる物々交換や商業施設としてだけでなく、「椿市」や「歌垣」の要素も併せ持っていたといわれており、葛梅里遺跡が祭祀遺跡とも市場とも判断が付きにくいのは、そういった複合施設であると考えられるからである。

しかし、韓国でのこの時代の比較資料が貧弱なため、現時点で遺跡の性格を断定することは難しい。

今後、韓国の資料の増加を待つて再検討をおこなうことと、日本の古代の遺跡との比較をおこなうことが課題となる。